

命 ひつめて

看護師石上節子さん(61)の夫孝雄さん(当時58歳)は、2005年8月に肝臓がんで余命1年と宣告された後も、しばらく病状が安定していた。孝雄さんは手紙など私物を整理しながら、電気やガスの契約者を妻名義に変更する手続きなどを淡々と進めた。

しかし、06年4月、風呂から出ると「お腹が苦しくて息ができない」と訴えた。がんの進行で腹部に余分な液体がたまり、肺を圧迫していた。利尿剤投与と鍼灸などで症状は収まったが、本格的な在宅緩和ケアが始まった。

介護用ベッドは、孝雄さんこだわりの映像・音響機器が据え付けられた居間の窓際に置いた。丹精を込めて世話してきた庭が、大きな窓越しに広がる。家族や来客の団らんの様子もよく分かる。02年に

第一部 自宅で看取る 田

病床で確認 夫婦の絆

建て替えた自慢の自宅の中でも、お気に入りの場所だった。

在宅緩和ケアを専門とする爽秋会(名取市植松)から、医師や看護師など誰かが一日一回、必ず様子を見に来た。医療的な処置は、水分補給の点滴や痛み止め、肝機能補助の薬剤など最小限の範囲にとどめられた。注射嫌いの孝雄

さんは、体をほぐす鍼灸やマッサージの方を喜んだ。

節子さんは東北大病院の勤務を続けており、日中は不在だった。訪問する同会スタッフとは、連絡ノートを紹介して容体の変化や心配事を伝え合っていた。だが、翌5月には、孝雄さんは自力で歩くことが難しくなり、意識障害も目立っ

てきた。6月、半年間の予定で介護休暇を取得した。

「仕事を続けると、結局、病院で夫の最期を看取ることになりそうな気がして。看護師になった人生を後悔したくなかったので、思い切って休みました」
一体いつ以来だろうか。自宅で夫婦水入らずで過ごす毎

日。昼間でも眠っていることが多くなった夫の枕元で、繰り返し優しく語りかけた。
「一緒になれて本当によかったね」
「2人のいい子どもに恵まれたね」
「いろいろあったけど、全部乗り越えられたね」
ゆったりとした時間が流れる中、言葉は返ってこなかったが、夫の表情はうれしそうに見えた。

「病院では夫、父親である前に患者です。でも家庭では、患者である前に夫、父親です。家族の絆を確かめる貴重な時間でした」
孝雄さんは、がん特有の強い痛みを苦しむことは、ほとんどなかったが、命の火は、急速に小さくなっていった。
6月17日、車いすでテーブルにつき、寿司でひと足早い父の日を祝った。これが家族で囲んだ最後の食卓となった。
3日後、往診した岡部健医師(同会理事長から「最期の日」がそろそろ近づいていましてと告げられた。(1)(1)(1)



孝雄さんは、庭がよく見える大きな窓際でギターを弾くのが好きだったという—池谷美帆撮影